

シェイクスピアの『ハムレット』を精読する レジュメ

★あらすじ

デンマーク王が急死する。王の弟クローディアスは王妃と結婚し、跡を継いでデンマーク王の座に就く。父王の死と母の早い再婚とで憂いに沈む王子ハムレットは、従臣から父の亡霊が夜な夜な城壁に現れるという話を聞き、自らも確かめる。亡霊に会ったハムレットは、実は父の死はクローディアスによる毒殺だったと告げられる。

復讐を誓ったハムレットは狂気を装う。王と王妃はその変貌ぶりに憂慮するが、宰相ポローニアスは、その原因を娘オフィーリアへの実らぬ恋ゆえだと察する。父の命令で探りを入れるオフィーリアを、ハムレットは無下に扱う。やがて、王が父を暗殺したという確かな証拠を掴んだハムレットだが、母である王妃と会話しているところを隠れて盗み聞きしていたポローニアスを、王と誤って刺殺してしまう。オフィーリアは度重なる悲しみのあまり狂い、やがて溺死する。ポローニアスの息子レアティーズは、父と妹の仇をとろうと怒りを燃やす。

ハムレットの存在に危険を感じた王はレアティーズと結託し、毒剣と毒入りの酒を用意して、ハムレットを剣術試合に招き、秘かに殺そうとする。しかし試合のさなか、王妃が毒入りとは知らずに酒を飲んで死に、ハムレットとレアティーズ両者とも試合中に毒剣で傷を負う。死にゆくレアティーズから真相を聞かされたハムレットは、王を殺して復讐を果たした後、事の顛末を語り伝えてくれるよう親友ホレイシオーに言い残し、死んでいく。

(以上 Wikipedia より)

■『NHK100分 de 名著 シェイクスピア ハムレット』より

王子ハムレットは、死んだ父の亡霊から復讐を命じられますが、その復讐をためらう最初の原因は、そもそも亡霊が本物なのか、それともその正体は悪魔なのか、という疑問にあります。

ハムレット (……) 俺が見た亡霊は
悪魔かもしれぬ。悪魔は相手の好む姿に身をやつして
現われる。そうとも、ひょっとして
俺が憂鬱になり、気弱になっているのにつけこんで
まんまと俺をたぶらかし、
地獄に追い落とそうという魂胆 (こんたん) か。
もっと確かな証拠が欲しい。それには芝居だ。
芝居を打って、王の本心をつかまえてみせる。 (第二幕第二場)

実はここには、カトリックとプロテスタントという、当時の宗教問題が関係してきます。亡霊という存在を認めるのはカトリックだけで、プロテスタントでは死者の亡霊などというものは認めていません。プロテスタントの見方からすれば、これは悪魔が見せる幻影ということになります。つまりハムレットは、カトリックとプロテスタントのあいだで揺れているという解釈もできるのです。その歴史的背景を少しばかり見ておきましょう。

エリザベス 1 世の父ヘンリー 8 世はカトリックでしたが、なかなか王子に恵まれないので離婚して、6 人の妃を次々に取り替えたことで有名です。しかしカトリックでは離婚は許されません。最初の王妃と別れようとしたとき、ローマ法王に許しを請いますが、すげなく断られます。法王と対立したヘンリーは 1534 年、カトリックを廃してイングランド国教会をイングランドの公的宗教に定めて、国ごとカトリックから離脱してしまいます。王が離婚したかったから国の宗教を変えてしまったという、冗談のような本当の話です。こうして、急速にプロテスタント勢力が台頭してきます。

ヘンリー 8 世の死後、幼い息子のエドワード 6 世はかなりプロテスタント寄りの治世を行います。次に姉のメアリ 1 世の治世になると、彼女は熱烈なカトリックの信者だったので、カトリック国のスペイン王と結婚してプロテスタント狩りをはじめます。プロテスタント大虐殺に由来する“ブラッディ・メアリ”(血なまぐさいメアリ) という呼び名は、真赤なトマトジュースとウォッカのカクテルの名前としていまも残っています。

ところが 1558 年、姉に代わって妹が即位してエリザベス 1 世になると、再びプロテスタントに戻り、今度は逆に厳しいカトリック狩りの時代になるのです。

シェイクスピアの父親ジョンは、敬虔（けいけん）なカトリックでした。一家の没落は、国教会に睨（にら）まれたことが原因ともいわれています。息子ウィリアムの人生に謎の空白期間があるのも、実はカトリックという出自からきているのではないかと、私は推理しています。

第一幕第五場で亡霊がハムレットに復讐を命じるときに、「終油の秘蹟（ひせき）も、懺悔（ざんげ）の暇（いとま）もなく」殺されたので、「赦（ゆる）しも受けず、この身に罪を負ったまま」死んだことが恐ろしい、と言います。つまりこれは、生前の罪をカトリックの儀式で清めて天国に行くことができなかつたと嘆いているのです。

また、ハムレットが叔父の犯罪を確信したあとの第三幕第三場で、祭壇に跪（ひざまず）いて祈るクロードィアスを殺そうと「今ならやれる」と剣を抜いたのに、ためらってやめてしまうのは、決して行動力がないからではなく、懺悔している最中のクロードィアスを殺してしまうと、「この悪党を送ってやるのか、天国に」というキリスト教的な発想があるからです。

カトリックの文化が情熱的だとすると、プロテスタントは理性的で冷静です。それは熱情の中世と理性の近代という対比とも相似形です。理性的な男の代表として登場するハムレットの親友ホレイシオは、亡霊に会いに行こうとするハムレットに、「殿下の正気を奪い去り、狂気へ引きずり込もうというのかもしれませんが」（第一幕第四場）と警告します。ハムレットがあとで冷静になって、「悪魔は相手の好む姿に身をやつして現われる」（第二幕第二場）と言うのは、自分の想像力が歪められて、父の亡霊を見せられているのかもしれないと思うからです。

シェイクスピア別人説でも候補に挙げた哲学者フランシス・ベーコンをはじめとして、当時の認識論では、人は視覚による光学的な情報だけでなく、心による想像力の働きでものを見ると考えられていました。〈心像〉というものが頭の中でつくられ、それを脳が認識する。だから、正しい想像力が歪（ゆが）められてしまうと、間違っただけのものを見てしまう。そこから、〈真実を映し出す鏡〉としての芝居という発想も出てきます。

（東京大学大学院教授の河合祥一郎氏の解説）

ハムレットの留学しているヴィッテンベルク大学について

ヴィッテンベルク大学は 1502 年、ザクセン選帝侯フリードリヒ 3 世が設立した。ルターの影響を受けたフィリップ・メランヒトンの活動により宗教改革の中心地となった。著名な出身者にはゲオルク・レティクスらがあり、フィクションの世界であるが、シェイクスピアのハムレット王子やクリストファー・マーロウのフォースタス博士もここで学んだことになっている。

ハレ大学は 1694 年、ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ 3 世（1701 年からは初代プロイセン王フリードリヒ 1 世）により設立された。プロイセンにおける敬虔主義の中心となる。著名な出身者にはゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル（法律を学ぶ）らがいる。

両大学とも 17 世紀、18 世紀にはドイツ啓蒙時代を中核として支えた。合理主義哲学を推進したクリスティアン・ヴォルフはカントらに影響を与え、同じころクリスティアン・トマジウスはドイツの哲学者として初めて講義をラテン語ではなくドイツ語で行っている。トマジウスは合理主義哲学の発展に寄与し、より公正な観点を確立することにより、それまで疑われることのなかった専制政治と神学の優位性に異を唱えることを目指した。

Get thee (you の古語) to a nunnery!

これはハムレットがオフィーリアに向かって言った台詞であり、特に論議を呼ぶ場面を構成する。大きく分けて二つの解釈がある。当時、尼寺では売春が行われており、隠語で淫売屋を表現する言葉だった。ハムレットはオフィーリアに単に「世を捨てろ」と言っただけでなく、「売春婦にでもなれ」と罵ったのである。

文字通りに俗世間を離れ女子修道院（尼僧院）に入りたいと願った。この場面ではポローニアスがハムレットを背後で伺っているが、オフィーリアには穢れた政治に関わらず昔のままに清らかな存在でいて欲しいと願った。

尼寺を単純に「売春宿」と解釈するかしらないか、については研究者の間でも議論があり、決着がついているわけではない。ただし、「尼寺」を「売春宿」と解釈する研究者は少数派と言われている。（以上 Wikipedia より）

- ハムレットは、なぜ、復讐をためらったのか？
- ハムレットは正しいのか？
- 「生きるべきか、死ぬべきか (To be, or not to be)」の意味